



「自然の風・風の文化」

真木太一・真木みどり 著
技報堂出版, 2014年9月
166頁, 2,200円(本体価格)
ISBN 978-4-7655-4478-8

本書は、「風の事典」(丸善出版, 2011)の編集・執筆や、「風と自然—気象学・農業気象・環境改善」(開発社, 1999)の著書がある風の研究者で、筑波の農業気象関係のたくさんの方の研究所・センターで務め、九州大学・琉球大学・筑波大学の教授であった真木太一氏と、つくば市で小・中学校非常勤講師、精神科クリニックで学習指導員を務めてこられた真木みどり氏の2人の共著である。すでに著者らは何冊もの著書・編著書があり、本書の構成・執筆態度は従来の傾向・特徴と変わらない。以下、本書の紹介と、私の若干の読後感・希望などを述べてみたい。

全体は30章から成り立つので、1章は平均5印刷ページである。各章のタイトルは、1. 風と病気・インフルエンザ, 2. 風と楽器・合奏, 3. 風と発声・歌, 4. 風がつくる神話と伝統行事, 5. おわら風の盆とおわら節・踊り, 6. 風と和歌・俳句, 7. 風と歴史・遣唐使, 8. 風と近代文学, 9. 風と海外文学, 10. 風と児童文学。ここまですが非理工学的なテーマを扱う。

続いて、11. 風で動く帆掛船, 12. 風を利用するヨットとウインドサーフィン, 13. 風と凧・カイト・吹き流し, 14. 風と穂波・樹梢波, 15. 黄砂と風による口蹄疫の輸送・伝染・蔓延, 16. 風による微生物と微粒子の移動, 17. 風による種子と花粉の移動, 18. 強風による偏形樹と縞枯れの発生, 19. 風と放射能汚染, ここまですが工学・農学・医学などに関連するテーマを扱う。

ついで、20. カタバ風・ブリザードと風速・気温, 21. 竜巻と突風, 22. 風と火炎熱・冷源が作る火炎旋風・竜巻, 23. 風穴の風は自然の冷蔵庫, 24. 風レンズがつくる風力エネルギー, 25. 風がつくる水と氷の雲, 26. 砂が渦巻く風塵・つむじ風と地吹雪, 27. 地吹雪による雪の風紋と吹きだまり, 28. フェーンとボラの局地風の特徴, 29. 晴天乱気流と渦・カルマン渦, 30. 最近の台風の特徴とその変化傾向。このように、気象学・気候学・風工学のテーマが並ぶ。しか

も、この見出しからもわかるように、1から10までのくりに比較して1段階詳しい。いいかえれば、自然の風の捉え方が、風の文化の捉え方より、詳しい。本書の3分の2の内容が自然の風を扱い、3分の1が風の文化をやや大まかに扱っている。このようなページ配分・記述基準の差がテーマ把握に影響していると考えられる。

さて、読後感について、以下に少し述べたい。

(1) 本書は学術書・教科書(この分野の専門研究者・学生を対象とする)なのか、小事典(不特定多数の人が必要ときに参考とする)なのか、教養書(一般人、特に中年層・高齢者の読み物)なのか、はつきりしない。最後に文献がついているのを見ると学術書・教科書を志向しているようであるが、後述するように体系だっておらず引用または参考文献が不十分で偏りがあり、教科書にはなりえない。小事典としては項目の取り上げ方がまったく検討されていない。教養書ならば、文献などは必要ないであろう。また、文化に関する記述が3分の1でよいのだろうか。結局、記述はそれぞれの章で詳しく、読んで興味は湧くが、本全体からのインパクトが弱くなってしまった。

(2) ギリシャ・ローマ時代はともかく、20世紀のこの分野の知見・研究の成果がどのように21世紀に生きているのかを読者がわかるように記述すべきであろう。例えば、ワトソンの「風の博物誌, 1999」は文献にあがっているが、20世紀の名著といわれるオーベル・ドゥ・ラ・リュウ(E. Aubert de la Rüe, 1955: Man and the winds)はあがっていない。本書の文献には「風の事典」の項目が多くあがっている。読者にこの本が「風の事典」の副読本または焼き直しの印象を与えているのが残念である。学問の歴史・発達史をよりどころにして、系統だった記述・文献引用が望まれる。

(3) 「風と音楽」に関わる章2, 章3は興味あるが、どうしてハ・ニ・ホ・ヘ・ト・イ・ロ・ハができるのか、どうしてこれがド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドになるのか。せっかくグレゴリア聖歌に触れているのだから、物理的な弦の振動の原理から、聖歌の最初の音程・歌詞発音の絡みを経て、歴史的に説明されるとよかった。そして、風が吹くとき、複数の物体の振動は、楽器が出す音程と異なり種々であるが、同時に耳に入ってきて雑音ではなく、現代音楽(吉野, 1993: 風の博物誌, 丸善, 60-61), あるいは雅楽のようである(吉野, 1999: 風と人びと, 東大出版

会、69-70)と聴こえた経験がある。イオリアン・ハーブの説明もどこかで触れてほしかった。なお、10ページ最下行の宮城道夫は宮城道雄のミスプリント、14ページ5行目の「ファスト」は「ファウスト」の誤りで、再版では訂正されたい。

(4)「風と音楽」に関しては、もう一つある。ベートーヴェンの交響曲、第6番、田園では、テムペスト(嵐)の描写よりも、私は柔らかな春の風そのものを感じさせるところに感心する。第1楽章のテーマI、あるいは、嵐が過ぎ去って、明るい日差しとやさしい風の吹き始めるところを表現するフレーズなど、風速計では計ることができない風の感触・風の状態を捉えていると思う。器械では計れない、しかし、人は受け取ることができる。これが人間の文化であろう。

(5)135ページのフェーンの説明②には誤解を生じる表現があるので、再版のときには訂正していただきたい。すなわち、“フェーンには低気圧に吸い込まれる気流が山地を吹き越して起きる場合と、高気圧の周辺で高気圧から吹き出す気流が山地を吹き越して起きる場合がある”という解説は正しい。しかし、前者が湿っていて、後者が乾燥しているという表現は現地で

は受け入れられない。なぜならば、フェーン現象で風下地域は常に乾燥するからである。ボラでも同様に、黒いボラ、白いボラという語は現地で使われるが、湿った・乾いたという形容詞は気象学者からも現地の人びとからも、聞いたことがない。

(6)日本の局地風分布図(図28.1)、フェーンとボラの特徴(表28.1)、偏形樹グレード区分(図18.3)、のオリジナルはYoshino(1975:Climate in a small area. Univ. Tokyo Press, または、吉野, 1989:風の世界. 東大出版会)にある。本書の文献リストでは、オリジナルについての見極めが初学者には困難である。学問における成果のオリジナリティ、紹介者・利用者としての情報発信、著作権の有無など、多くの問題がある。特にIT時代になって、情報は独り歩きをするので、問題はさらに複雑・深刻になるであろうと強く感じた。

以上、本書を紹介し、読後感を述べた。気象学に関係し、風に吹かれて毎日生活しておられる方がたにぜひ読んでいただきたい本である。

(筑波大学名誉教授 吉野正敏)